

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(3 2)

中村周平

これまでに引き続き、首を痛めてしまったためにできなくなった、PC への入力方法とその打開策や解決方法について触れていきたいと思います。

首を痛めるまで使っていたマウススティックによる入力方法は、2007 年の大学 3 回生の時に行なった、社会福祉士の実習課程で、何か自分にできることはないかというところから模索し、発見した方法でした。また、自分だけで発見できたわけではなく、その当時お世話になっていた実習ゼミの担当教員や、ゼミの仲間たちの協力によって実現できた方法でした。

その後、各セメスターでのレポートやメールの返信、卒業論文や修士論文といった全ての作業を、このマウススティックによる入力で行ってきました。多くの方々の協力によって発見できたこと、そしてそれを十数年間続けてきたこれまでの経緯が、出来なくなったという事実により重くのしかかってきました。

「首にこれ以上の負担をかけることは絶対に避けなければならない。」

「ただ、これから論文も含め多くの文章を打つ必要がある自分にとって、PC は不可欠なもの。その入力方法は出来る限り早く見つけなければ色々な所に支障が出てしまう。」

それほど私自身の生活にとって、PC が無くてはならない存在になっていました。そして自分に合った入力方法を探していくことになりました。

まず、最初に思い当たったのは音声入力でした。この方法は、受傷直後から何度も挑戦し、そして挫折していた方法でした。その理由としては、二つありました。

一つは、あまりにも誤変換が多いということでした。今でこそ音声入力は、スマートフォンなどで一般的に使われる機能ですが、私が受傷した当

時は、PC にそういった機能は付いておらず、非常に高価なソフトを購入する必要がありました。また、音声の認識能力も、決して良くはありませんでした。短文であればある程度使い物になりましたが、長文になると誤変換を修正する時間が非常にかかってしまい、音声入力の利点の一つである、時間の短縮とは相反するものでした。

もう一つの理由としては、これは非常に自分事で恥ずかしいのですが、滑舌の問題でした。幼少期は自分でも気づきませんでした。中学生あたりから周囲に滑舌の悪さを指摘されることが多くなり、自分でも自覚していくことになりました。お世話になっている鍼の先生曰く、舌の長さとお口の大きさのバランスが悪いとか。また、受傷後は肺活量の低下も重なり、周りから非常に聞き取りにくい音声になってしまいました。研究活動の関係でインタビュー調査を行った際、その内容の文字起こしで一番苦労するのは自分の滑舌の悪さでした。最近では音声認識の性能も高くなり、誤変換も少なくなったのは良いことなのですが、滑舌の悪さまで正確に変換してしまうことで、結局のところ修正箇所が減ることはあまりありませんでした。

今回改めて音声入力を試してみました。現在では、音声入力がある程度標準機能として使うことが可能となっていました。また、落ち着いてゆっくり話せば、ある程度正確に読み取ってくれることがわかりましたが、やはり滑舌の悪さによる誤変換が気になることも確かでした。

文字の入力はこれによってある程度解消されましたが、タッチパネルのおかげで問題なくこなしていた、クリックやドラッグの機能は音声だけで

はなかなか解消できませんでした。音声による解消方法もいくつか発見することができたのですが、それは選択したい箇所に番号を付加し、それを選択するという方法で、番号が振り分けられない箇所は選択することができないという難しさがありました。

「音声入力以外に何か方法はないものか」

以前お世話になった PC や IT 機器に詳しい方に情報をいただけないかと連絡を取ってみました。そして、私が受傷した当時にはなかった方法をいくつか教えていただくことができました。相談に乗ってくださった方は非常に丁寧に対応してください、いくつかの製品も薦めてくださいました。

その中から二つにしばらく、直接業者の方に連絡を取って行きました。